私の日本語体験

歯学研究科博士課程歯学臨床系専攻４年

アブル・ムキブ・カーン
A. M. Khan

今日は！ シュボ オプランノ Shuvo Oporanno

日本語を話すこと

今では、私は不自由なく日本語を話す能力には自信をもち、他の日本人もそう言う。そのことについて、いつも尋ねられる。「あなたはどのようにして日本語を上手に話すことを学んだのですか」。私が日本に来た時（約五年前）、私の知る唯一の日本語は「Domo arigato」（どうもありがとう）で、いつも、外国人に対する、日本人の親切さと無関心を同時に味わった。

最初の六カ月間

私は「Intensive Japanese Course」で多くの留学生と逢い（日本人よりも）、彼らとの話を通して、「fun and miserable」を日本・日本人に感じた。つまり、「fun」、Hiroshima のすべてが私には new で、excited だった。「miserable」それは、communication problem から来るものだった。そこで、唯一の解決方法は日本語を学ぶことだ、と気づいた。

私の国、バングラディッシュ

たいてい、私の国の人たちは二つの言語、「Bengali」と「English」を話す。日本語の Sentence と grammar は Bengali 語と多くの共通点とそうでない点を持つ。そのため、私は「Kanji」やその読み方の違いになやんだ。とくに、ひとつの word は多くの意味と使い方があり、ひとつの「Kanji」は多くのむずかしい発音もある。それらにとりくむほど、私はさらに悩むことになり、結局、grammar は考えずに、それぞれの Sentence を暗記することが一番である、と悟った。

スポーツ愛好について

私はとくにテレビで、毎夜、いつも野球を見てすごし、カープファンになった。そのため、その野球中継に耳を傾けて、その日本語を覚えることになった。それは私の日本語能力を飛躍的に向上させ、speaking ability と vocabulary を増加

させるために、日本語を話す方向に行った、と思う。さらに、日本語を話すchanceを増やすため、私は道をきいたり、簡単なことを問いかけることにした。それで、外国人に対する日本人の反応（うまければ、アレッ、という表情……、そのあとの、首をかしげる仕草などや、意味のわからない笑い……）を知った。ホームスティのプログラムはそれらを一層学ばせた。

研究のことなど

私は、多くの教授や仲間にめぐまれて今年の九月、Ph.D thesis のための発表を日本語で行うことができた。それは今までの体験が生きたものと思う。研究生活の日々の他には、趣味として写真を撮ることに精をだした。そうすることで、私はストレスやら、様々な不慣れなことからくる苛立ちを解消することができた。今では、「日本人よりも日本人らしい」と言われるけれど、それは日本人の外国人に対するどのような感情からくるのか……、考えているこの頃である。

島根県浜田の近くの海岸（1992年９月筆者撮影）